5．食道癌根治照射例の治療成績

川上浩幸，安田茂雄，有賀　隆
磯部公一，原　竜介，小手重臣
町田南海男，宇野公一（千大）

1985年から1994年までに千葉大医学部付属病院放射線科で食道癌根治を目的として放射線治療を行った50例に対し治療成績及び予後因子を検討した。外照射は，10MV-X 線を用い38-72Gy，平均58Gy。腔内照射は，137Cs 管を用い1回6Gy，週1回で2回を基本とし，6-21Gy，平均12.5Gy。総照射線量は40-85Gy，平均63Gy であった。累積2年生存率は30.9%，生存期間の中央値は10ケ月であった。各因子に関しログランク検定を行った結果，腫瘍の形状（全周性，非全周性），腫瘍径（長径が5㎝を超えるか否か）は，予後因子として重要であること，総線量，所属リンパ節への予防照射，腔内照射，化学療法の有無は治療成績に有意な影響を与えなかったことが示された。

6．乳房温存療法の治療成績

風間俊基，宇野公一，安田　茂
有賀　隆，磯部公一，原　竜介
町田南海男，小手重臣（千大）

対象は1987～1994年の間に乳房温存療法を千葉大学放射線科にて受けた人58名中，治療脱落2名を除いた56名。平均年齢は50.2歳であった。照射方法は乳房に10MV-X 線接線照射（ボーラス5㎜）で44～50Gy，電子線ブースト0～20Gy（総線量44～66Gy）。手術方法はQ＋Ax が最多をしめ，併用化学療法はほぼ全員がTAM を使用し，また5FU 系経口抗癌剤使用が約半数をしめた。病期はステージ1が44名と多数をしめた。病理分類では浸潤性乳管癌が44名と最多だった。

副作用（47例中）は早期障害として軽度の肺炎を2例，皮膚の erosion を5例認めた。晩期障害は軽度の乳房の萎縮を2例，telangiectasia を3例認めた。

平均観察期間37.9ケ月（10～106ケ月）で，局所再発1名＝1.8%（再発後再手術），遠隔転移2名＝3.6%（頚部リンパ節転移1名，骨転移1名）であった。

7．全身骨転移に対する多分割半身照射の意義

宇木章喜，小林雅夫，田中恵美子
古川雅彦，山下　孝
（癌研究会附属病院）

【目的】悪性腫瘍の多発性骨転移による疼痛には放射線治療が有効であり，我々の施設でも当初は1回6～8Gy の半身照射（HBI）方法を試みたが，全身倦怠などの副作用が強く中止した。連日1.5～2Gy/fr，総線量8～10.5Gy の照射方法の効果と副作用について報告する。**【対象と方法】**1990年～1995年に有痛性の骨転移を有する癌患者（造血器腫瘍を除く）で HBI を実施した15症例（19照射部位）を対象とした。原疾患は乳癌12例，肺癌3例で，組織型は，腺癌12例，小細胞癌1例，不明2例であった。照射方法は10MVX 線対向2門，1日1回連日1.5～2Gy 照射にて総線量は8～10.5Gy/4～5fr/5～8days であり，目標とした10Gy/5fr の照射を行ったのは16部位であった。照射野は Upper-HBI は臍より上，Lower-HBI は臍より下とした。除外1症例は10Gy/5fr の U-HBI の予定であったが腹痛のため2Gy で中止した。**【結果】**20照射部位中19部位で HBI を完遂出来た（95%）。HBI 後の疼痛緩和の効果は疼痛完全消失4，著効11，不変4と19中15部位（79%）に疼痛緩和の効果を認めた。HBI 後に HBI 照射野内の局所照射を行ったのは8例であった。副作用は10症例（1同一患者を含む）に認められ，内訳は嘔気4例，嘔吐3例，食思不振3例，全身倦怠3例，発熱1例，骨髄抑制5例であったが，輸血を必要とした1例を除きごく軽度のものであった。**【結論】**多分割 HBI は多発性骨転移の疼痛緩和に有効な方法であり，その効果は欧米で一般的な6～7Gy を1回照射する方法と比較して遜色なく，重篤な副作用も少なく行える治療である。**【オリジナリティ】**多分割 HBI の効果と副作用に関する本邦での調査は少なく，有意義な研究である。

8．頭頚部 Adenoid Cystic Carcinoma の画像所見 －CT，MRI を中心に－

大坂　巌，木村真二郎，植田琢也
大石園美，高野英行，宇野公一
（千大）
日野　剛　（同・耳鼻咽喉科）
那須克宏　（井上記念病院）
幡野和男，関谷雄一
（千葉県がんセンター）
嶋田文之　（同・頭頚科）

1987年～1995年の3施設において，MRI を施行した ACC 患者16例を対象とし，病変と筋肉および粘膜との intensity の比較，subtype 別の MRI 所見の比較，perineural invasion の CT，MRI 像の検討を行った。筋肉に対しては T1WI で iso，T2WI で high intensity を呈した。subtype 別では粘膜に対して，cribriform type は low，tubular type は high intensity を示した。perineural invasion は5例にみられ，CT では expansive な神経孔の開大が骨条件で良好に，MRI では神経の走行に一致する描出が sagittal 像，coronal 像で良好であった。骨破壊像は，permeated 0例，erosive 2例，expansive 3例と長期的な臨床経過に